

神奈川県藤沢市鵠沼中学校地区 防災連絡協議会の取り組み ーシナリオからラジオドラマへー



藤沢市立鵠沼中学校で開催されたシナリオ型避難所運営ワークショップ



鵠沼中学校を防災拠点とする鵠沼中学校地区
防災連絡協議会がワークショップを主催



防災ラジオドラマの収録風景

神奈川県藤沢市の鵠沼中学校区地区防災連絡協議会は、2002年に組織されて以来、熱心に地域の防災活動に取り組んでいます。NIEDでは、同協議会と協力し、全国で初めて「シナリオ作成型避難所運営ワークショップ」を実施しました。その記録は、地元のNPO法人藤沢災害救援ボランティアネットワーク（FSV）によって整理され、関係者や藤沢市の防災担当部局が事実関係の確認を行いました。

こうしてでき上がった基礎資料をもとに、ラジオドラマのための脚本が制作され、高校生や協議会メンバーなどが参加し、2009年4～7月に地元のコミュニティFM局で「地域発・防災ラジオドラマ in 藤沢 鵠沼中学校地区防災連絡協議会＜地震編＞」として放送されました。

地域発・防災ラジオドラマづくりについて

防災科学技術研究所（NIED）では、全国の自治体や住民の方々と協働して、災害に強い社会を実現するための制度や技術に関する研究開発に取り組んでいます。

特に大規模な災害への備えや発生後の対応力を高めるためには、行政や消防団のみならず、町内会を単位とする自主防災組織や住民主体の避難所運営組織などに加え、防災を目的としないさまざまな市民活動団体や福祉関係団体、地元の商店や事業者などが、地域固有の災害特性を共有し、協力・連携することが不可欠になります。つまり、平時の市民活動や市民協働のネットワークが地域の防災力の潜在力と考えられます。

そこで、NIEDでは、住民が主体となり、当該地域で起こりうる災害リスクを具体的に想定し、さまざまな機関と協働して対策を検討・実施することを誘発するリスクコミュニケーション手法として、地域発の防災ラジオドラマづくりを提案しています。

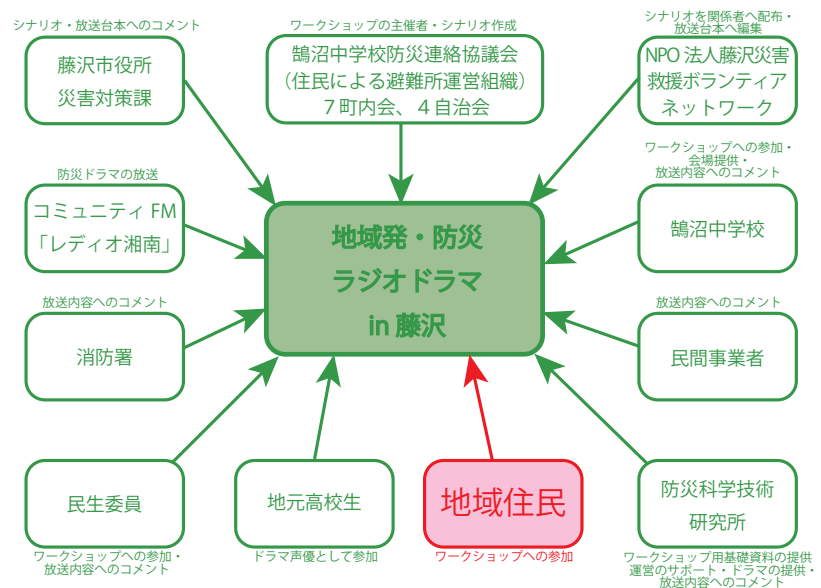
この住民参加による防災ドラマづくりの過程では、住民が行政や専門家などと具体的な意見交換が展開されることで、専門的な知識と地域の知恵を融合した新たな防災対策のアイデアが創発されるこ

とが期待されます。さらに、たとえば防災ラジオドラマとして地域のコミュニティFM局や学校の校内で放送することにより、日頃防災活動に参加していない住民や生徒ひとりひとりが地域防災の主役であるとの認識を高め、市民協働に基づく防災対策の取り組みのきっかけ作りに寄与できれば幸いです。

現在、NIEDでは、全国で防災ラジオドラマづくりを支援しています。また、地域でのドラマづくりは、

地域の課題や魅力を見える化し、市民協働によって課題解決を図る手法として、防災分野以外でも応用が期待されており、今年度、包括的な地域ケアマネジメントやその災害時事業継続をテーマとするドラマづくりに取り組む計画です。

以下では、神奈川県藤沢市における大規模地震災害のときの避難所運営をテーマとする防災ラジオドラマづくりの取り組み事例を紹介し



地域のさまざまな主体がかかわる防災ラジオドラマ in 藤沢

「地域発・防災ラジオドラマ in 藤沢」作成の過程 ーシナリオからラジオドラマへー

災害をシナリオで考えることの 大切さ

人にとって物事を効果的に理解するためには、単に事実が述べられているよりも、物語のような形に表現されているものが良いといわれています。私たちが譬え話（たとえばなし）を説明に用いるのはそのためです。これは科学的な事実を理解するうえでも同様で、難しい理論が述べられているよりも、具体的な例が示されているほうがずっとわかりやすいものです。

めったに起きない災害のような事態を想像することは日常生活の中では容易ではありません。そこで起こりうる態についてその地域

に生活し、働き、学んでいるさまざまな関係者が知恵を出し合い、想像する場が必要です。私たちNIEDでは、災害リスク情報プラットフォームの研究開発の一端として、地域の関係者の協働によって災害時のさまざまなシーンをシナリオ化するという試みを提案しています。

ロール・プレイングの効果と意味

地域の関係者が協働すると言っても、単に集まって協議するだけでは良いアイデアが浮かばないこともしばしばです。そこでプロジェクトではロール・プレイング型の議論により、災害時の具体的な

状況をイメージする仕組みを考えました。

人は仮面をかぶると発言や行動が大胆になると言われていますが、ロール・プレイングとは与えられた役になりきって、場面を演じることを指します。これにより災害という非日常的な状況について皆が対等な立場で議論し、事態を想像することが可能になります。

避難所ワークショップで シナリオを作る

災害は地域ごとにまったく違った様相で発現しますし、人によって受け止め方や被害の出方は大きく異なります。そこでNIEDでは、

地域住民の方々が災害時に最も連帯して対応しなければならないであろう単位を避難所とし、その区域をひとまとまりとして地域の防災を考えることを提案しています。そしてそのためのひとつの手法として、住民を主体とした「シナリオ作成型避難所運営ワークショップ」を各地域で展開しています。

2008年7月、神奈川県藤沢市立鵜沼中学校で初めて開催された「シナリオ作成型避難所運営ワークショップ」は、鵜沼中学校地区防災連絡協議会のメンバーを中心に、地域住民や学校の先生方も加わり、およそ30名の方々が参加、途中昼食休憩をはさんでほぼ1日の日程で進行されました。

初めに、この地域に被害を及ぼす可能性のある地震に関してNIEDのスタッフより説明を行い、今回は切迫性が高くないものの、過去に起きた災害として地元の方々によく知られている「1923（大正12）年の関東大震災の再来」という前提で、ワーストケースを想定としたシナリオを検討することになりました。

行政が作成した被害想定結果では、災害の全体像としての数値は示されていますが、果たしてそれはどの場所で誰に起こる被害なのかという具体的なところまでは表現されていません。このワークショップでは、“避難所”という、地域住民同士の平時の関係性と有事（＝災害時）における対応力が最も試される場で起こりうる8つの状況（場面）について、議論し、参加者にそれぞれの役を演じてもらいました。このエピソードは最近地震災害で、実際に避難所で起こった事態から作成したものです。

ラジオドラマの脚本作り

1つの状況（＝場面）についてかける時間はおよそ30分程度であったにもかかわらず、参加された方々の演技は真に迫った大変迫力のあるものでした。このワークショップの記録を、地元の防災NPOである藤沢災害救援ボランティアネットワーク（FSV）のメンバーが整理し、関係者に回覧してコメントをもらいました。さらに藤沢市の防災担当部局にも目を通してもらい、事実誤認がないかなどの確認をお願いしました。

このような過程を経てできた基礎資料に基づいて、次にドラマのための脚本づくりの作業に取り掛かりました。脚本づくりは、元鎌倉市の職員で、地元で演劇集団を主宰され脚本も手がけられている水島孝さんをお願いしました。水島孝さんは、FSVの事務局長である水島三千夫さんの弟さんでもあります。

このような過程を経て、計8回分のラジオドラマが出来上がりました。

声優の募集とスタジオ収録

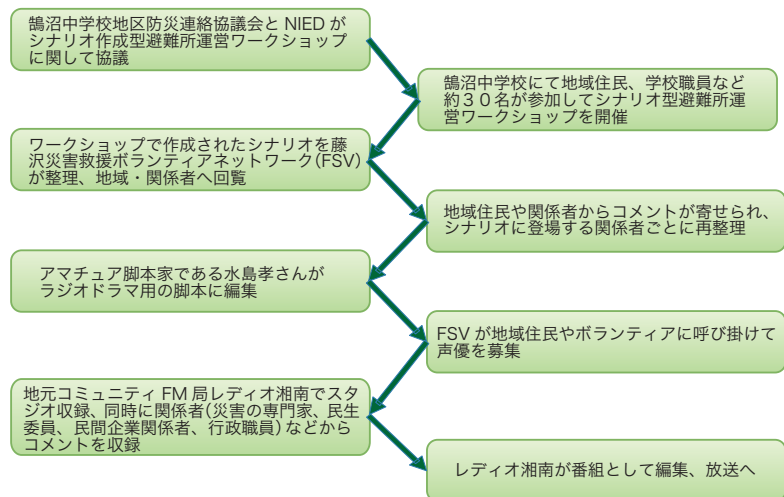
FSVの協力で地元鵜沼地区の住民の方はもとより、藤沢市内の他地区の住民の協力も得られて、10名を超える市民声優陣が揃いました。皆さんにとっては声優初体験ですから、いきなり本番というわけにもいきませんので、FSVの森井会長の自宅にあるスタジオを借用して練習をしました。とはいえ、それぞれ多忙なこともあり、読み合わせ1回、通し稽古1回であとは台本を持ち帰って収録日まで各自で練習するという方式です。最初は皆おっかなびっくりのスタート

でセリフも棒読みという感じでしたが、回が進むにつれてセリフ回しもなめらかになり、最後はもっとやりたいという声も上がりました。

ラジオドラマの持つ意味

この手法は、大きく見ると地域の災害対応の構造を根本的に見直すという意味を含んでいます。すなわちこれまでのように住民は住民のことを、行政は行政のことをそれぞれ黙々とやるのではなく、時には連携し、時には支え合い補合って災害に立ち向かうことで、より困難な事態を乗り越えるための地域防災力を高めようとするものです。

防災ラジオドラマの完成は、防災活動に熱心な組織や団体だけでなく、学校や市役所、ボランティア、地元コミュニティFM局などさまざまな地域の主体となる方々が協力し合った結果であり、そしてこのことが大事だと考えています。このように多くの主体が共に支え合う水平協働型社会こそが、災害時の対応に不可欠なものであると、われわれのプロジェクトでは考えています。



地域発・防災ラジオドラマ in 藤沢ができるまで



地域発・防災ラジオドラマ in 藤沢 —避難所シナリオがドラマになりました!—

放送は毎週木曜日13:00～13:30
レディオ湘南 83.1MHz、あるいはHPからも聴取可能

- 第1回 避難所施設の安全確認と開設(4/2放送)
- 第2回 避難者名簿の作成をどうするか(4/16放送)
- 第3回 避難所に来られない人の存在が分かったら(5/7放送)
- 第4回 近所の飲食店からの食料の差入れ(5/21放送)
- 第5回 外国人被災者との関係を考える(6/4放送)
- 第6回 新住民と旧住民との関係を考える(6/18放送)
- 第7回 災害ボランティアが地域に受け入れられるにはどうするか(7/2放送)
- 第8回 介護の必要な家族を抱えた被災者への地域からの支援(7/16放送)

一セリフの読み方は難しかったけれど、防災を意識する良いきっかけになりましたー

志村亜理沙さん（鵜沼高校 3 年）

ラジオドラマの中で、主人公の高校生「藤沢市子（ふじさわいちこ）」役を演じた志村さんは、逗子市から藤沢市に通う高校生。ドラマは夕暮れ時、夕食の支度をする母との会話からスタートします。毎回「藤沢市子」が、避難所で起きるさまざまな出来事について、素直な気持ちや思いを語るモノローグ形式で進められています。



学校にこのラジオドラマの出演依頼があったときは演劇部の生徒を、ということだったのですが、演劇部がみんな忙しくて、たまたま私が生徒会のことをやっていたので先生から声がかかり、おもしろそうだと思って引き受けました。

一番大変だったのは、台本の読み方で、抑揚の付け方が難しかったです。私は、ほかの方との掛け合いのセリフなどがほとんどなくて、モノローグ（独白）だったので、収録のときも一人でした。リハーサルでは演技指導の方がいろいろとアドバイスしてくれました。でもいざ本番、となるとやはり緊張しました。いまは無事終わってほっとしていますし、何より防災のことをいろいろと勉強することができてよかったと思っています。

ラジオ局での収録は初めてだったのでそれはすごく楽しかったです。

普段は家でも学校でも、防災のことはほとんど意識したことがなかったので、実際に地震が来た時に、ということが問題になって、それに対してどうしていかなければならないのか、ということが少し実感できるようになりました。

私の学校は藤沢市民会館で合唱コンクールをやっていて、その際の移動が避難訓練を兼ねているのですが、なかなか意識してやるという感じにはならないですね。藤沢以外から通ってきている生徒もいるし、いまは受験の話が中心なので、なかなか学校で防災について改めて話すようなチャンスがないです。

でもこれからは、地震が起きたらどうするかを家族で話し合っておこうと思いましたし、またこのラジオドラマを通して、学校でも防災についてみんなが考えるきっかけになればいいなと思っています。

一シナリオ型避難所運営ワークショップでの成果が、ラジオドラマに生かされたと思いますー

長瀬輝行さん（鵜沼中学校区地区防災連絡協議会）

鵜沼中学校地区防災連絡協議会ができたのは、いまから 7 年前の 2002 年のこと。6 つの町内会が自主的に立ち上げた防災組織も現在は 7 つの町内会と 4 つの自治会が参加し、熱心な取り組みが行われています。この連絡協議会を取りまとめる長瀬さんは、「ラジオドラマ制作の素材作りの場となったシナリオ型避難所運営ワークショップは有意義なプログラムだった」と語ります。

協議会ができたきっかけは、鵜沼中学校に当時いらした島田先生という教頭先生が、鵜沼中学校の防災マニュアルをつくれ、また中学校が避難所として指定されていたこともあって避難施設のマニュアルも作られたことに端を発しています。

何人収容できるのか、体育館がいっぱいになったら、どの教室から開放していくのかなどを盛り込んだわけですが、そこで島田先生は、学校が避難所として開設されたときに、それを運営するのは近隣の町内会の方々だということに気付かれたわけですね。学校はあくまでも施設の提供者であって、運営に関してサポートはするけれども主体にはならない。中学校としては PTA とは縁があるけれども、しかし地域や町内会とは縁がない。どうしたものか、と声をかけられて話をしたのがきっかけです。

そこで当時は 6 つだった町内会で防災連絡協議会を立ち上げようということになり、まずは各町内会の代表の方が集まり、校長先生、教頭先生も参加して、防災マニュアルについて説明をしてもらいました。それを踏まえて、各町内会の

防災担当者が定期的に会合を持とうということになったのですが、しかし最初は何からやっていいのかよくわかりませんでした。藤沢市には避難所の運営マ



ニュアルがあるのですが、そこには開設したら組織をつくりなさい、会長、副会長を置いて、役割を分担する班をつくりなさい、と書いてある。班というのは名簿班、情報連絡班、食料需給班などもろもろです。そもそも町内会というのはあまり横のつながりがないので、お互いのことがよくわからない。

そこでまずは避難施設となっている鵜沼中学校の校内はいったいどうなっているのか、施設を見て回ろうということになりました。これは互いに理解し合うきっかけになりましたし、われわれも初めてなのだから、ましてやほかの住民の方々ももっとわからないだろうから、活動のひとつの目標として、施設の見学会をやろうと企画しました。

3月に実施しましたが、大変好評で2日間で400人ほどが参加してくれました。翌年は、避難経路、学校へ来るまでの道のりを確認しよう、という体験訓練を行い、3年目は、避難所の設営訓練を行いました。ゴザや毛布をどうするか、プールの水をどう運ぶか、防災備蓄倉庫から何を持ってくるかなど、各町内から1〜2チーム出してもらって、リーダーを選出してその指揮のもとで行動する、という試みをやってみました。避難群集心理を研究されている慶応の石橋先生に協力いただいて、伝言ゲームのようなものもやりました。4年目は炊き出し訓練をしましたが、これは結構大変でそのための予行練習も行いました。

3年目ぐらいまでは独自で、講師をせいぜい防災対策課の人をお願いする程度でやっていたのですが、4年目ぐらいから、市民センターも参画してくれるようになり、鶴沼中学校の学校祭りで我々の活動の展示なども行いました。

また、われわれはあくまでも未経験者がこうなるだろう、と想像しながらやっていることもありましたが、地震災害を経験された新潟県柏崎から町内会長さんをお呼びして体験談をお話いただいたこともあります。

鶴沼中学校では9月1日の防災の日に、生徒を一斉下校させるということをやっています。これは、藤沢市は中学生以上を災害時の戦力として考えているからです。小学生は災害が起きた時には父兄が来るまで学校待機、なのですが、中学生は家に帰って町内会をお手伝いする、という位置づけです。

また中学まではジュニア防災リーダー講習がありまして、今年度から授業で取り入れることになっています。しかし、高校になると県立あるいは私立になってしまうので、なかなか難しいですね。高校も施設そのものは避難施設として指定されているわけで、周辺の住民が利用するわけですから、そのあたりの連携は必要でしょう。

協議会が活動を始めて2年目ぐらいしてから、駅前にマンションが3つあるのですがその方々が入れてほしい、と言って来られ、参加していただきました。そんな歴史を重ねて、いまは7つの町内会と4つの自治会で運営していて交流も盛んになりました。

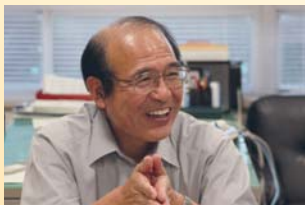
そんな過程で3年ほど前からNIEDとのお付き合いが始まり、「シナリオ型避難所運営ワークショップ」に取り組むことになりました。これは非常にいい経験になりましたね。ワークショップでは、参加者それぞれに役割分担があるのですが、互いに気心がしれているところもあって、言いたいことが言い合えたのでしょうか。同じ鶴沼中学校区でも、各町内で独自に防災訓練をやっていますし、それぞれテーマも違いますし、防災倉庫の中身にも特色があります。ただお互いに中身をわかっていますから、いざとなったら助け合うことができる。

こうした「シナリオ型避難所運営ワークショップ」で出されたさまざまな意見が素材になって、今回の地域発・防災ラジオドラマが出来上がったわけですが、これがまた地域の防災力を高めていく上でのひとつのきっかけになればいいなと思っています。

一中学生を、災害時の大事な戦力としてどうやって育てていくかを、 地域の皆さんと考え、その仕組みづくりに取り組んでいきたいですー

松永 実さん（藤沢市立鶴沼中学校校長）

「子どもたちは地域で育つ。子どもたちはいざという災害時に、必ず戦力になる。中学生の力を活用しよう」という信念のもと、教育の一環として防災にも取り組んでいる鶴沼中学校。「自分たちの身は自分たちで守り、さらに地域や社会のためになるような意識を育てるような教育に積極的に取り組んでいます。



私の先代である第16代の丸山伸一校長は、「子どもは地域で育ち、そして地域の戦力になる。そういう気持ちで子どもを教育し、そして地域に帰そう」という信念をもっておられ、地域と学校のつながりを大切にされていました。

私もこの考え方に非常に共感しており、そういう気持ちで防災を含めた教育に力を入れています。鶴沼中学校では毎年9月1日に防災訓練を行っています。その中で子どもたちを地域に連れて帰り、自治会に引き渡すという訓練も行っています。しかし、自治会に引き渡すだけでなく、

子どもたちが活躍する場についても地域と共に考えていくという姿勢も大切だと思っています。

災害時にはお父さんやお母さんが仕事で家にいないといった子どもたちが相当数想定されますし、また家の近所には一人暮らしで身動きがとれなくなっているお年寄りも少なからずいることでしょう。そういうときに、知識も体力もある中学生が地域において何らかの役割を果たすことができるのではないのでしょうか。

もちろん高校生のほうが体力はあるでしょうが、市内の生徒は市外に通学したり、また市外から通学する生徒も多く、常日頃から地域に密着した活動を行うことはなかなか難しい。そこで、中学生の力に期待しているわけです。

災害時に真っ先に思い浮かぶのが、「人の命」ということですが、人命救助や、災害物資が届いたときの仕訳や配布、お年寄りや障害を持った方の介護のお手伝いなど、中学生でもできることはたくさんあるはずです。阪神淡路大震災のときにボランティアが数多く参加しましたが、中でも印象に残っているのは中学生の活躍です。そのときの記録をある本で読んだのですが、お年寄りが水汲みに行くのが大変なので、近所の中学生たちが毎日交替で水を汲んで届けたそうです。「ボランティア」という言葉も意味もわからない子どもたちでも、人のために尽くすという気持ちが自然と生まれている。それこそが本当のボランティアだ、という内容でした。

阪神淡路大震災の時、海外のメディアはこぞってロサンゼルス大地震のときのような暴動が起きるだろうと予想しましたが、そういうことはまったく起きませんでした。彼らは日本の道徳性に驚いたそうです。そういう良さをわれわれは皆持っています。これは教育にも通じるところがあります。子どもたちにも常日頃からそういう話をしていますし、これはいじめ撲滅にもつながります。「やりなさい」という命令ではなくて、こうした気持ちが自然と湧き上がってくるような学校づくりをしていきたい。道のりは長いですが、その気持ちは忘れないでいきたいと思っています。

アメリカの海洋学者のモースが江ノ島で貝塚を発見しましたが、そのときに書いた本の中に、鵜沼のことが書かれています。机の上に小銭を置いたまま外に出かけたことが何度もあるけれども、きれいに掃除はしてあっても、お金が無くなったことは一度もない。そういう国は日本だけだ、と。ここの子どもたちはそういう人たちの子孫です。鵜沼中学校には、こうした日本人の道徳性や良さをもった子どもたちがたくさんいます。

防災についての取り組みも、教育の一環として大いに活用していきたいと思っています。藤沢市では、中学生を対象としたジュニア防災リーダーの研修に力を入れています。学校でもこれに協力しています。昨年度から、防災のための座学を1時間、実習を3時間の計4時間を学校教育の中に取り入れることになりました。鵜沼中学は市内でも有数のマンモス中学ですから、時間配分やスペースの確保などに苦慮しましたが、良い体験プログラムが実施でき

たと思います。研修の内容は、応急手当の基礎知識、心肺蘇生、AEDの取り扱いといった救命や止血法など、人の命にかかわるお手伝いです。そのほかに起震車の体験、消火器の取り扱い訓練、バケツリレーなども含まれています。初めての体験でもあり、子どもたちは喜んでやっていたし、PTAも参加してくれましたので、学校と家庭と地域が一体となった、良い取り組みだと思っています。

昨年度は、高校入試後、卒業前の最後の勉強で学んだことを地域に還元するという意味合いも含めて、3年生が受講しましたが、今年度は授業時間数との兼ね合いもあって1年生が受けます。いずれにしても卒業までに全員が受講してジュニア防災リーダーの証書を手にすることになります。高校に行ってしまうとそれぞれの目的があるので難しいですが、義務教育の間に一度でも経験しておけば、いざというときに後輩たちと一緒にやってくれるのではないかと期待しています。

また学校は災害時の避難所施設に指定されている所が多いですが、鵜沼中学校でも体育館は最近耐震補強しましたので、地域の中では避難所としても大きな役割を果たすものと考えています。

学校が避難所になるとどうしても学校の先生を頼られる方もいらっしゃるのですが、先生は先生で授業の再開という大きな役割がありますから、地域の方々には地域の自治で対応していただけるとありがたいですね。災害時には先生方も被災するわけで、そうなれば自分の家族のこと、住んでいる地域のことと考え、さらに学校のことも考えて行動しなくてはなりません。先生方も地域の人間であり、地域の組織の一員でもあります。この鵜沼地区は防災連絡協議会の皆さんの活動のおかげもあって、「自分たちのことは自分たちでやろう」という意識が高まっていると実感しています。

いまの子どもたちを見ていると、体験が不足しているということを感じます。昔のように遊びながら学ぶといった環境もありませんから、そうした体験と知識も学校で教えていかなくてはならないのかもしれません。その意味でも、子どもたちが自分の身を自分で守り、さらに地域や社会のために力になれるよう、災害や防災について積極的に取り組んでいきたいと思っています。



シナリオ型避難所運営ワークショップ

— 一人の立場に立つてものを考えることにできるようになったのは、
このドラマづくりでの大きな収穫でした—

大田哲夫さん（鵜沼地区自自連防災部副部長、鵜沼東地区民生委員）

「一人がみんなのためにみんなが一人のために」をモットーに住みよい地域づくりに邁進している大田さんは、町内の防災部長や民生委員、児童委員などを務められ、日々さまざまな役割をこなしています。今回のラジオドラマでは声優としても参加しました。



私自身は藤沢災害救援ボランティアネットワークを立ち上げたことで、NIED とのかかわりが生まれました。

鵜沼地区は藤沢市 40 万人中 5 万 4000 人が居住する地域で、人口密度が高いし道も狭いので、防災が一番悪いところなんです。今回のラジオドラマづくりでは、防災に関して新しい技術を学び、スキルをアップする上で、とても効果的でしたし、意義のあるものでした。また声優にも挑戦しましたし、楽しく参加させていただきました。

ワークショップやドラマ作りにかかわって一番大きく変わったと思うのは、人の立場に立つて物事を考えることができるようになったということでしょうか。シナリ

オを作成するときには、ロールプレイである役を演じることになります。シーンごとに立場を入れ替えていきますので、その都度発想も切り替えていかなくてはなりませんし、そのとき、その場でその人物が何を考えているかを想定しなくてはなりません。常に自分の立場で物事を考え行動しているのが通常ですが、さまざまな立場に立つて物事を判断し、意見を述べる機会は大変必要なことだと感じています。特に子どもや若い人にこのような人の立場になって考える場を与える意味で、シナリオ作りは大いに役に立つ手法だと思います。

今回のドラマには民生委員がかかわる場面がありますが、ストーリーの各場面は未体験のことであり、このようなシミュレーションの体験は大変有意義でした。また民生委員の研修会などでやってみたいですね。

— 「減災」という意識を市民一人ひとりに持っていただき、自分たちの地域は自分たちで守る
という気持ちで、必要な備えをしていただきたいと思いますね。
行政としてもそのためにできる限りのサポートをさせていただきます—

林 晃さん（藤沢市総務部参事兼災害対策課長）

藤沢市の災害対策の最前線で、市民と向き合いながら日々防災、減災に取り組んでいる林さん。行政がやるべきことを明確に示し行動するとともに、地域における自助共助の大切さもぜひ理解して、一人ひとりが災害に対して備えてほしいと語ります。

藤沢市では 2009 年 3 月に、「洪水ハザードマップ（北部版・中部版・南部版）」と「津波ハザードマップ」を作成し、洪水は全戸に、津波は沿岸地域に配布しました。藤沢市は海岸線を有していますし、河川もありますから、洪水・津波の被害からは避けられません。

市民の皆さんに災害時に想定される被害状況をあらかじめ知っていただくことで、災害に対する備えを常日頃から意識していただきたいと思います。こうしたハザードマップは行政からの一方的な情報になりがちですが、今回は、住民の皆さんにもご協力いただき、過去水害があった箇所については住民の体験も盛り込んで作成しました。事前に「皆さんの地域の状況はこうですよ、被害想定情報をお知らせするとともに、ワークショップを開催して、逆に行政が知り得ない情報を市民からいただきました。例えば、床上・床下浸水の場合、一時的に水が出てもその後すぐに引いてしまった場合には、情報として行政にあがってこないケースがあります。今回、実態に即した的確なハザードマップをつくるためにこのような手法をとりました。

さて、鵜沼海岸地区は引地川を抱えていることから、特

に水害のリスクが高い地域です。また、海岸線と引地川の上に位置する鵜沼南小学校は避難場所に指定されていますが、津波ハザードマップからも津波の被害を受けることが想定されています。このことから、引地川より内陸部の方々は引地川を渡ってまで鵜沼南小学校に行くことはありません。なお、このハザードマップに記載されている避難経路については、ワークショップの過程で地域の皆さんから聞き取って記載したもので、住民が長年の経験則を踏まえて作成したものです。



藤沢市は南北に長い市で、北部は相模丘陵の非常に固い地盤ですから地震にも比較的強いですし、水害にしても河川の上流ということから氾濫は少ないです。しかし南部は川と海岸線があり、液状化なども起こるような地盤です。南部の片瀬地区は他の地区と比べて高齢化が進んでいる地域ですが、逆に自分たちの町をどうやって守るかという意識も高いです。

藤沢市は南北に長い市で、北部は相模丘陵の非常に固い地盤ですから地震にも比較的強いですし、水害にしても河川の上流ということから氾濫は少ないです。しかし南部は川と海岸線があり、液状化なども起こるような地盤です。南部の片瀬地区は他の地区と比べて高齢化が進んでいる地域ですが、逆に自分たちの町をどうやって守るかという意識も高いです。

しかし藤沢市全体では、例えば消防団員も高齢化が進んでおり、募集してもなかなか集まらないという声を聞きます。地域の防災リーダーをどう育てていくかということは大事なことですが、実際にはなかなか難しいです。

行政が対応できる範囲にも限界や時間差がありますし、被害の度合いによって優先順位も変わりますから、まずは自分たちの地域は自分たちで守る、という意識をぜひ持っていただき、必要な備えをぜひお願いしたいと思います。

藤沢市ではいま、災害時には地元の中学生を大きな戦力として活躍してもらおうということで、市をあげてジュニア防災リーダーの育成に取り組んでいます。ただしこれは市が主導というより、地域、学校、住民が一丸となって防災に取り組むためのきっかけづくりととらえています。まずは市内19の市立中学校でジュニア防災リーダー研修会を行い、そこで学んだ子どもたちが地域と連携し、地域で活躍できるような仕組みづくりを行っています。平日の日中に大地震が起きた場合、お父さんあるいはお母さんは会社などに出かけていて家にいない可能性が高いですし、また地域にいないのはおじいちゃん、おばあちゃんということになります。そのときに中学生が、大きな力を発揮してくれるのではないかと。行政としても大いに期待している所です。

また大事なことは、家族でどこに避難するかを決めておくということです。わが家では、火事になったり家が壊れたりしなければ、基本的には「家にいる」ということを家族と確認しています。地震が来たら即避難施設ではなく、在宅避難もあります。

災害を完全に防ぐことはできないことで、市では「防災」ということだけでなく、「減災」という観点から取り組んでいます。大地震が発生した時のことを考えて常日頃何をどう備えておくのか、が大切です。家の耐震補強もその一例だと思います。絶対に倒壊しないということではなくて、耐震補強をしておけば倒壊するのを遅らせることができることにより、被害が少なくてすむ可能性があります。家具の転倒防止対策もそうです。家の中の家具（テレビ、冷蔵庫、ピアノなど）が、災害時には凶器になります。藤沢市では法外な値段を請求されることがないようにと、家具の

取り付け業者と協定を結んで、ご家庭の家具の転倒防止についての支援を行っています。また、防災用品にしてもわざわざ買って揃えるのではなく、一度防災の観点から身近にあるものを見直してみると活用できるものがあることがわかります。このように「減災」という考え方を一人ひとりに持っていただくことと、自助と共助の大切さを訴えています。

最後に、地域の防災力を高めるためには、市民の防災意識を高めていただくということが必要です。自主防災組織の結成も大事ですが、結成しただけではなく、いかに継続して活動しているかが重要です。組織を結成する際には、やる気のある町内会の役員さんなどが音頭をとるのですが、交替してしまうと活動が停滞してしまうケースが多いです。藤沢市は自主防災組織の結成率が90数パーセントと、県内でも高いのですが、結成率を高めることと並行して、自主防災訓練などの活動をいかにやっていただけるか。それも市の訓練ではなくて、自主防災会の皆さんでいかに独自の防災訓練を実施していくことができるか、ということが大切です。日頃から防災訓練をやることによって意識が高まるということが現実にはわかっていますので、市では担当者が出向いて、防災訓練の重要性などをお話しています。

いつ大地震が来てもおかしくない状況にあって、藤沢市では想定計画をどう見直し、被害想定をどう判断するのか、これからの大きな課題だと思っています。2009年7月に発表されました「神奈川県地震被害想定調査」の報告書によれば、藤沢市では南関東地震が発生した場合の避難者が約18万人という想定です。そうすると避難者全員が避難施設に入ることは大変難しいことから、家は壊れていないがライフライン等が途絶したことによる在宅避難者をどこまで見るのか。在宅避難者で、必要な生活物資などを避難施設に受け取りに来るという状況も考えられます。そういう状況についても、ぜひ市民の皆様には理解をお願いしたいと思います。約18万人の避難者の内訳も地区によって違いが出ると思いますので、市としてはそのあたりもきちんと整理して、今後の地域防災計画に反映していきたいと思っています。

ーラジオドラマをきっかけに、自分たちの安全は自分たちで確保するといった、皆さんの防災に対する意識が少しでも高まればうれしいですねー

森井康夫さん（NPO 法人藤沢災害救援ボランティアネットワーク（FSV）理事長）

危険度判定士として阪神淡路大震災の現場で仕事をした森井さんは、そのとき初めて地震の怖さを体感し、日常のネットワークが災害時に大きな力となることを実感したとのこと。地元の災害ボランティアの取りまとめ役として、また町内会の防災部長として、精力的に活動しています。

私が防災への取り組みを意識したのは阪神淡路大震災の時のことです。当時娘夫婦が仕事の関係で大阪に住んでいたのですが、本社に転勤になったということで、正月休

みを利用して神奈川で住まいを探していたんです。9日に決めて15日にこちらに戻ってきて2日後に、震災が起きました。

それまでいたマンションもだいぶ揺れて、家具などが転倒したそうです。私は、当時湘南建築組合に入っていて、危険度判定士の資格を持っていたので、屋根の補修などの応援のために現地に入りました。そのとき、ボランティアの方々の活動などを目の当たりにして、日ごろからこうした取り組みやネットワークがなければ、いざ関東で地震が起きた時にどうするのか、という危機感を持ちました。

そんなことがきっかけとなって、推進協議会というボランティア団体で事業部長をやっていたので、早速災害ボランティアの事業を立ち上げました。

その後藤沢ボランティアネットワーク（FSV）という組織をつくり、NPO 法人の認可も取得しました。今では藤沢市からも FSV を頼りにしていただき、またその行動にも注目し、防災訓練や避難訓練の際には協力してもらっています。一方で市の災害対策課でも災害ボランティアコーディネーターを養成していて、今200人強いますから、いざというときには重要な役割を果たしてくれるだろうと期待しています。

仕事柄、関東大震災を経験した家の修理などもけっこうやるのですが、柱が折れていたり、ちぎれていたりしているケースがあります。「家が三尺ぐらい歩いた」という話も伺うことがありますから、相当に揺れたんでしょうね。地震は怖いなあ、ということを実感しますよ。ですから、困った時、助けが必要なお互いさまで、支援に行き、また支援に来ていただくという関係づくりを大事にしています。

藤沢市の場合は、沿岸部では液状化現象が起きる可能性があります。山間部では山崩れ、がけ崩れなどがあるでしょうが、これは起きるところとそうでないところがあると思います。宅地改造でも、削ったところと埋めたところでは大違いです。埋めたところは地滑りのようにドッと動いてしまうことがあります。新潟県の柏崎原子力発電所の近くの町に行った時も、埋めたところは地盤が動いてしまったために、その周辺の家屋には全部「立ち入り禁止」の赤紙が貼られていたことを思い出します。

鵜沼はもともと砂地で、松林か田んぼのどちらかでした。地盤的には平均地盤が低い、つまり水位が高いわけです。昔は1メートル掘ると地下水が出てくるような状況でしたが、20～30年前に下水をきちんと整備しましたから、今は水位が下がって3メートルぐらいに入りますから、かつてはそこから40～50センチ下が水の層だったわけで、揺れれば液状化現象になりますよね。砂地は地耐力と言って建築法上では重さに対して強いのですが、水が出てはだめですね。水は高いところから低いところに流れますが、低いところでは淀んでしまいますから、排水のスピードが遅い。藤沢は地震だけでなく、水害という危険もはらんでいる地域なんです。鵜沼地区は何度も水害を経験していますから、多少の知識や備えもあるでしょ

う。ただ地震については関東大震災以降、揺れることはあっても建物が壊れるまでの地震は経験していません。

いま取り組

みたいと思っているのは、一般の家庭の支援や救援はもちろんですが、地震が起きたあと、人々がどれだけ早く仕事に復帰して生活の糧となる収入を得て安定的な生活を送ることができるようになるか、ということです。そのためにも、もし地震が起きた時に企業がどのように対処して1日も早く会社を立ち直らせて操業を再開できるのかということがとても重要です。もし再開できなければそこに勤めていた人たちは一斉に失業してしまうことになりますから。ただ藤沢市内の企業でも、そのあたりの意識をもって災害対策に備えている企業はまだまだ少ないですね。これからの災害対策はそここのところも考えなくてはいけないのではないのでしょうか。生活再建の目安を造るという意味でも、企業や産業の復興は大事なことなのですが、まだまだ実態は追い付いていないようです。

地震で人生模様がかわることもありますから、まずは命を落とさないこと。それにはどうすればいいのか。どんな時間帯に起きるかによっても、対応の仕方は異なりますよね。

建物に関して言えば、昭和56年以前と以降では、耐震基準が異なります。古いお家にお住まいの方には耐震補強をしていただきたいですが、まずは家具の転倒防止を呼び掛けています。また寝ているそばに履物や、呼び子代わりの笛を置いておくといったこともお伝えしています。私の町内会では防災活動を活発に行っていて、年2回の防災訓練のあとにはバーベキューなどで交流して顔の見えるお付き合いを心がけています。町内会長は交替しますが、防災部長はずっと私がお引き受けしていて、実は昔の分譲地で公園用地や防災倉庫を置くような空きスペースがないものですから、自宅の車庫に防災器具を置いてあります。

今回のラジオドラマづくりでは、私も声優として参加させていただきましたが、素人は素人なりに味があってよかったという評判も聞きますし、参加された皆さんの関心も高くして良いドラマができたと思います。ただ放送時間帯が昼間だったこともあって聴けなかったという声もいただきましたので、CDで制作していつでも聴いていただけるような体制を整備しておくことも必要ですね。

このドラマが、市民一人一人が地震に対する意識を持ち、自分の安全を確保する方法を自分たちで考えるきっかけになればいいですね。



ーこのラジオドラマをきっかけに、自分たちの地域の 強みと弱みが見えるようになりましたねー

水島三千夫さん (NPO 法人藤沢災害救援ボランティアネットワーク (FSV) 副理事長)

災害救援ボランティアネットワークの活動を通して地域の防災力向上に日々努力を続ける水島さんは、今回のワークショップやドラマづくりを通して、参加者の地域に対する関心が確実に高まったと実感しています。



藤沢災害救援ボランティアネットワークは藤沢市全域を対象としています。私はもともとサラリーマンで地域とあまり関係がなかったのですが、

たまたま娘の高校のPTA会長を引き受けることになり、地域とのかかわりができました。

そのとき副会長だった森井工務店の森井さんが、阪神淡路大震災のときに危険度判定士で現地に入られ、藤沢市でも安心できるような防災体制を持つ必要があるということ強く感じられた。しかし何をどうすればいいだろうか、と相談されたのがきっかけです。そこで関係者を集めてネットワークをつくり、安心安全なまちづくりを目指そうとスタートしました。

ちょうどそのときに、藤沢市役所で災害時のボランティアの受け入れ態勢をどうするかという検討会が始まったこともあり、市民活動推進連絡会というボランティア団体をつくってましたので、連絡会として参加するようになりました。

その後、検討会は準備会にスケールアップして、災害ボランティアネットワークをつくらうということになったのですが、事務局の引き受け手がないという状況でした。そんなときにたまたま市の市民活動推進センターの指定管理者制度を連絡会が受託することになり、その関係からボランティアネットワークの事務局も引き受けることになった次第です。2003年に任意団体になり、NPO法人化したのが2006年です。

藤沢市では、総合防災センターに安否情報を確認するシステムが稼働していて、13の行政センター、公民館から避難した方の安否情報が本部に上がってくるようなネットワークができています。デモではうまくいくのですが、では実際に避難施設に避難者がきたときに、誰が名簿を整理して端末に入力するのか、ということになると市ではとても対応ができない。そこで、ボランティアを募集して手伝ってもらおうという仕組みづくりをするようになり、訓練もそこから入って行きました。

この活動をしているときに、藤沢市が防災科学技術研究所と共同研究を始めることになり、その中で、浸水調査についてデータで理論的には構築できるが予測と一致しているかどうかの実地調査をボランティアを集めてやろうという取り組みがあり、これがNIEDとお付き合いするきっかけになりました。GPS付き携帯を持って歩いて現地の情報を送り込む、という活動を通して、災害情報員や市民レポーターなど

の取り組みもできるのではないかと話が広がりました。

FSVでは、災害救援ボランティアコーディネーターの育成に力を入れており、年に2回の養成講座を実施して3年間で240～250人ほどが受講してくれました。しかし、まだまだコーディネーターが足りない地区もあります。大体ボランティアセンターを立ち上げるとその運営に30～40人が必要ですし、3交替制と考えますと、1センターに120人ほどが必要です。いまは独自に立ち上げられるところが3カ所ほどしかありませんから、呼びかけをして育成に力を入れています。

神奈川県には災害ボランティアネットワークがあり、そこに私たちも参加しているのですが、ボラセンを立ち上げる時のマニュアルをつくる際、中越地震のときを参考にしようとして現地でいろいろ調べたのですが、小千谷は小千谷方式、川口は川口方式と個別になっていてスタンダードがありませんでした。当時は社協が中心ではなくて、各地域のNPO団体などがやっていたこともあったかと思いますが、神奈川県では地域性もあるので多少のアレンジはするにしても、スタンダードマニュアルをつくりました。

その一方で、鶴沼中学校区の方々と「シナリオ型避難所運営ワークショップ」に取り組むことになりました。1課題30分程度として、8課題を1日でこなしました。3グループに分かれて、それぞれの課題について出た意見を、2人ペアの記録係がまとめていきます。まずは参加者にその役になり切って演じてもらう。役の割り振りは当日その場で行いますから、最初の1課題、2課題ぐらいはとまどいもありますし、自分の意見にならなくて、人の話を聞いてしまうのですが、だんだんと慣れてスピードアップしていきます。ファシリテーターの役割も重要ですね。

そして出てきた意見をまとめて、参加した人、関係者にフィードバックしてコメントや感想をもらいます。さらにそれを大体のテーマごとにフラグを立てて整理し、物語に仕立てていくという作業です。今回のラジオドラマの脚本は、劇団を主宰している私の弟が手掛けたのですが、個人個人が思い思いに発言した内容を整理して、シーンごとにドラマにして脚色してくれました。かなり大変だったようですが（笑）。

FSVとしてはボランティアセンターを中心とした活動が主だったので、避難所はあまり気にしてなかったのですが、今回をきっかけに意識するようになりました。いま市も避難所施設運営委員会を立ち上げて、運営委員の研修会なども始めていますし、避難所従事者は市の職員なのですが、それは避難所の力を開けられるということで、運営は住民の手で自主的に行っていかなければなりません。

避難所でも日常生活はしていかなければなりませんから、そういう意味でも、自分たちでつくるというこのラジオドラマの制作は非常に良い取り組みだったと思います。また、かかわった方たちの地域に対する関心は確実に高まったと感じています。災害ボランティアとかセンターといっても知らない方が多い。だからこそ、こうしたワークショップに参加して自ら活動することでボランティアとの付き合い方を知ることも大切なんだと理解していただける。そういうことでも、このドラマは良かったと思います。さらには、誰がいつまでに何をやらなければならないか、役

割分担をどうするかなど、自分たちの町内の強みと弱みが見えてくる。そして自分たちにできないところがあれば、何が何でもがんばるのではなくて、誰かにサポートしてもらおう、ということも重要です。

こうしたワークショップやドラマづくりによって、自分たちの町のいろいろな面を発見することができますし、また誰とどのような連携をとっていけばいいのか、というつながりも見えてくると実感しています。そして今回の体験を、次のアクションプログラムにつなげていくことが大切でしょう。

一地域に密着したコミュニティ FM の役割を改めて実感しましたー

藤崎聖子さん(藤沢エフエム放送(株)「レディオ湘南」制作部・パーソナリティー)

藤崎さんは、今回のラジオドラマのナレーションを担当。ドラマを通して人と人とのつながりの大切さを実感し、また災害時には放送する側の立場として今回のドラマは非常に勉強になったとのこと。

コミュニティ FM がクローズアップされ、その関心が高まるきっかけになったのは、1995 年の阪神淡路大震災です。コミュニティ FM は地域密着がキーワードで、災害時には有効な手段と言われており、防災目的の趣旨で設立する地域もあります。いまは全国 231 局が開設されています(2009 年 6 月 22 日現在)。

藤沢エフエム放送(株)は、1995 年 5 月に設立し、翌 96 年 4 月に開局した第 3 セクターのコミュニティ FM として湘南地域のさまざまな話題を取り上げると同時に、災害発生時には藤沢市から送られる情報を発信しています。一昨年の水害時にも 24 時間放送を続けていました。

平時の災害関連の番組としては、1 日 3 回、防災インフォメーションとして、たとえば地震が起きたときに地下鉄に乗っていたら、エレベーターに乗っていたらこう対応してください、とか、救急箱のチェックをしておいてください、といった豆知識のような情報を放送しています。また月に 1 回、藤沢市災害対策課からの防災訓練放送(緊急時割り込み訓練放送)を流しています。

神奈川県内には NHK を除いて 12 の FM ラジオ局があるのですが、災害時におけるネットワークを組んでいて、もしの場合には必要な機材や要員を提供し合うといった協定を結んでいます。県内 12FM 局という多数の局で協定を結ぶのは全国でも初めての事でしょう。

このラジオドラマについては、リスナーのご意見等を特に募集しているものではないので直接的な聴取者の反応はつかめないので、市役所などは広報誌に取り上げて下さり、市長もご理解されています。もっと広く聴いてもらえるようにという声もありますが出力が 20W という制限があって聴取範囲が限られてしまいますから、そこが難しいところですね。

レディオ湘南でもインターネットでの放送や、J:COM 湘南さんと提携することでカバーしています。こうした地域

発の防災ラジオドラマは藤沢だけでなく全国の方に知っていただきたいですね。インターネット放送はどこでも聴けますから、ぜひ聴いて下さい。



今回のラジオドラマでは、収録と編集に立ち合わせていただきました。何も起きていない時に防災のことを考えるというのはなかなか難しいことですし、私自身が災害のときには被災者でありながら、情報を伝えなければならない立場の人間ですから、本当に勉強になりました。実はこの 3 月に藤沢市に越してきたばかりで、一市民としても、実際に自分が災害に遭ったらどこに避難すればいいのかもわからなかったのも、こうしたラジオドラマを体験できて本当に良かったです。

また、鶴沼地区だけでも防災に携わる団体がたくさんあることにも驚きました。普段はあまり関わりがなかったグループの方々が一緒にこのドラマをつくることで地域の方同士、繋がりが出来た事は良かったと思いました。このドラマが、たくさんの方々が災害時に備えるきっかけづくりになってくれることを願っています。

それから脚本を読んで初めて、ボランティアの方の受け入れ態勢や、外国人の方とのコミュニケーション、お年寄りや障害者への対応など、災害時には実にさまざまな問題が起きるということもよくわかりました。

レディオ湘南では 2 市 1 町(藤沢市、茅ヶ崎市、寒川町)の広報番組があり、私は藤沢市を担当しています。その中で「防災メモ」というコーナーで地震、津波、洪水などについて扱っています。また、「消防通信」のコーナーでは災害対策課の方に取材したり、消防士の方にお話を伺ったりしていますので、皆さんに災害時、正確な情報をお伝えできるよう連携の体勢づくりも心がけています。

一方、新潟のコミュニティ FM の方から、災害後は 24 時間音を流していたと聞きましたが情報がなくても、音楽などを流し続けることで勇気づけられた方も多くいたそうです。

今回のラジオドラマは、改めてコミュニティ FM の役割とは何かを考えるきっかけにもなりました。私たちも、地元の皆さんに的確な情報を提供していくことができるよう努力していきたいと思います。そして、藤沢市も南北に広

いですから、鶴沼地区だけでなく今後いろいろなエリア、シチュエーションで地域発の防災ラジオドラマができれば、ことを期待しています。



(上記のインタビューは、2009 年 6～9 月の間に実施しました。)

鶴沼中学校地区防災連絡協議会 ー避難所運営シナリオワークショップ第 1 号ー

鶴沼中学校地区防災連絡協議会は、この中学校を避難所とする 6 つの町内会により 2002 年に組織され、現在は 7 つの町内会と 4 つの自治会が参加し、防災への活発な取り組みを行っています。

2008 年 7 月に、協議会が主催し NIED が協力して、避難所運営のためのワークショップ（以下 WS）が、地域住民や鶴沼中学校の先生方など約 30 名が参加して開催されました。初めに、この地域に被害を及ぼす可能性のある地震に関して NIED から説明を行い、今回は切迫性が高くないものの、「1923（大正 12）年の関東大震災の再来」という前提で、ワーストケースを想定したシナリオを検討することとし、「避難所」という、地域住民同士の平時の関係性と災害時における対応力が最も試される場で起こりうる 8 つのシーン（状況と課題）について議論しました。

WS の記録は NPO 法人藤沢災

害救援ボランティアネットワーク（FSV）のメンバーが整理し、関係者や藤沢市の防災担当部局にも事実確認やコメントをお願いしました。

この基礎資料を基に、アマチュア脚本家の水島孝さんが全 8 話の脚本を作成しました。声優には、主人公の高校生役を演じた志村亜里沙さん（鶴沼高等学校 3 年生）、長瀬輝行さん（鶴沼中学校地区防災連絡協議会会長）、大田哲夫さん（鶴沼東地区民生委員）をはじめ、地元住民など約 10 名が参加し、藤沢のコミュニティ FM 局「レディオ湘南 83.1MHz」で収録。2009 年 4～7 月に、「地域発・防災ラジオドラマ in 藤沢 鶴沼中学校地区防災連絡協議会＜地震編＞」として放送されました。

この防災ラジオドラマについて、鶴沼中学校の 1～2 年生 69 名に対してアンケート調査を行いました。「防災ドラマに興味を持

ちましたか？」の問いに対して、「持った」との回答が 69.6%、「災害時に避難所や地域がどのような状況になるのか想像できましたか？」については、84.1%が「できた」と回答しました。また避難所でいろいろなトラブルが起きることが、印象的な出来事としてとらえられていることがわかりました。この中学生のアンケート結果について協議会にもフィードバックを行ったところ、「中学生を交えた防災シミュレーション訓練の実施」「中学生を対象としたシナリオづくり」「学校教育の一環としての防災学習への取り組み」などの提案がなされています。

協議会ではさまざまな成果を踏まえ、2010 年 3 月 28 日には避難所の開設と運営のための防災訓練を実施する予定です。



避難所運営ワークショップの様子